

Kestenberg Movement Profile における 運動分析専門用語の解釈に関する検討

崎 山 ゆかり, 中 めぐみ
(武庫川女子大学文学部教育学科)
(おや・こムーヴメント Atelier M)

A study of interpretation for technical terms of movement analysis through Kestenberg Movement Profile

Yukari Sakiyama, Megumi Naka

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

There are lots of obstacles to interpret technical terms of movement analysis such as differences of English and Japanese. Kestenberg Movement Profile (KMP) is an useful method to evaluate children's movement, however it is difficult to understand by simple translations into Japanese just referring to English-Japanese dictionary. So it needs a kind of special words to bridge the gaps between linguistic words and actual meanings. Questionnaire survey was done in order to pickup specific imaginary words to express the movements' essence. 13 female university students who don't know KMP chose appropriate words by themselves freely to express each movement, observing it by KMP specialist. They could choose any Japanese word and sentence selecting verbs, nouns, adjectives, and onomatopoeias. The result told us that much more onomatopoeias were used than verbs and adjectives.

Focusing on Tension Flow Rhythm (TFR), we also have to interpret psychoanalytic meanings behind each word. In order to choose the best Japanese translation words, we need diverse information from visual, linguistic and basic understanding for the frame of references.

It is also recognized that opposite Japanese words would be better than direct translation words when we cannot figure out what KMP technical terms meant. In addition, we should refer psychoanalytic developmental theory such as oral, anal, urethral, inner genital and outer genital phases when we translate Tension Flow Rhythm into Japanese.

1. はじめに

子どもはその成長の過程で、発達段階に応じた運動機能を獲得していく。身体機能としての動きの獲得だけではなく、その動きが持つ心理的意味合いにも着目して、子どもの心身の健やかな発育発達を見守る必要がある。Kestenberg Movement Profile (KMP)¹⁾は、精神分析的理論基盤をふまえた動きの分析方法であり、動きを心理療法的に用いるダンスセラピーにおける子どもの動きの評価法として、臨床場面で広く活用²⁻⁵⁾されてきた。しかしながら、わが国でのKMP研究は未開拓な分野であり、これまで大橋⁶⁻⁷⁾によるKMPの調律(attunement)などの概念の紹介がなされているが、KMP成立の背景となる理論的基盤についての検討はされていない。また基礎となる文献が日本語に翻訳されることはなく、す

べて英文での理解に限られていた。これまで筆者(崎山)⁸⁾は、拙稿において KMP 理論の概要を紹介しながらそれを基礎資料とし、子どもの動きの評価法としての可能性を検討した。しかしながらその概念提示の際、運動分析上の専門用語の日本語訳について、辞書的な意味での正しさが必ずしも KMP 理解にはつながらないという、専門用語の解釈の困難さを実感することとなった。運動分析の中心理論であり、KMP にも多大な影響を与えたラバンの運動分析法、Laban Movement Analysis (LMA)においても、その日本語での理解には困難があり、国内のラバン研究者である大貫⁹⁾は、「ラバンの理論は理解するのではなく、ああこういうものかと『了解』するものだ」と述べている。そこには、西洋の身体文化から生まれた運動分析を日本語で理解し、その動きの意味を解釈する壁を感じざるを得ない。

そこで本研究では、今一度 KMP の基盤の理論であるテンションフローリズム・テンションフロー特性・エフォートの前兆の 3 つの項目に着目し、改めて KMP の発達理論をふまえた運動分析的解釈を検討し、よりわかりやすく動きがイメージしやすい日本語を考える試みを行うことにする。具体的には、KMP 指導者監修によって作成された専門家による KMP の動きの映像を基に、テンションフローエフォートシステム(システム I)で提示される動きからイメージされる日本語を抽出する調査を実施する。KMP を知らない保育者を目指す学生が目で感じ得た乳幼児期の動きのリズムの特徴を自由に言語化してもらい、その言葉から紡ぎだされるリズムの特性を探りながら、KMP が示す動きの本質を見出し、KMP 専門用語の適切な日本語訳を規定するための検討をすすめていきたい。

2. 方 法

- (1) 対 象 保育者を目指す大学 4 年の女子学生 13 名
- (2) 調査日時 2010 年 5 月 11 日(火) 11:00 ~ 11:30
- (3) 内 容 KMP の動きを映像化した DVD の中から、テンションフローエフォートシステム(システム I)のすべての動作を無音で提示し、その映像から想起される動きをイメージする言葉を自由記述形式でアンケート調査した。記入時間の制限は設けず、調査対象者全員の記入が終わるまで待って、次の動作を提示した。基本となる動作の原語は次の Table 1 の通りである。

Table 1. テンションフローエフォートシステム(システム I)の動きを示す原語

Tension Flow Rhythm テンションフローリズム	Sucking ⇔ snapping/biting Twisting ⇔ strain/release running/driftng ⇔ starting/stopping swaying ⇔ surging/birthing jumping ⇔ spurting/ramming
Tension Flow Attributes テンションフロー特性	flow adjustment ⇔ even flow low intensity ⇔ high intensity gradually ⇔ abrupt
Precocious of Effort 前駆エフォート	Flexibility ⇔ channeling Gentleness ⇔ vehemence/straining Hesitation ⇔ suddenness
Effort エフォート	indirect ⇔ direct lightness ⇔ strength deceleration ⇔ acceleration

* システムの核をなす 4 領域については、欄内に日本語訳を記した。

- (4) 提示映像 KMP Strut Mary Armstrong 作・構成, 出演. Susan Loman 監修.
Antioch University New England 製
テンションフローリズムについてのみインターネットでサンプル映像の閲覧が可能である。
詳細は、<http://www.antiochne.edu/ap/dmt/kmp.cfm> 参照のこと。

(5) 領域毎の検討方法

1) テンションフローリズム

提示した 10 種類の動き毎の自由記述で用いられた言葉について、助詞を除いて、動詞、名詞、形容詞・副詞、オノマトペ、その他に分類し、用いられた言葉全体数における比率を算出。

2) テンションフロー特性

フローに関する対の用語について、自由記述より共通する表現や意味を抽出。

3) エフォートの前兆

flexibility と channeling を取り上げ、自由記述より共通する表現や意味を抽出。

4) エフォート

既存のラバンの運動分析に関する用語と共通するため、今回は分析の対象外とした。

(6) 調査用紙 Figure1 に示した。

動きをイメージする言葉についてのアンケート

このアンケートは、子どもの発育発達に関する動きの映像を見て、その動きのイメージの言語表現について調査するものです。回答の内容は、この調査以外には用いません。ご協力よろしくお願いいたします。なお、このアンケートに関するご質問があれば、下記までご連絡ください。

武庫川女子大学文学部教育学科幼児体育研究室 崎山ゆかり
Tel&Fax0798-45-9768 sakiyama@mukogawa-u.ac.jp

映像に映し出される動作を見て、その動きを表すと思われる言葉を自由に書いてください。動詞、名詞、形容詞、オノマトペ、いずれでもいくつでもかまいません。

映像	あなたが思いついた言葉
1	
2	
*	*映像 3～23 に該当する行は割愛
24	
25	

ご協力ありがとうございました。

Figure 1. 調査に用いたアンケート用紙(一部の記入欄は割愛)

3. 結 果

(1) テンションフローリズム

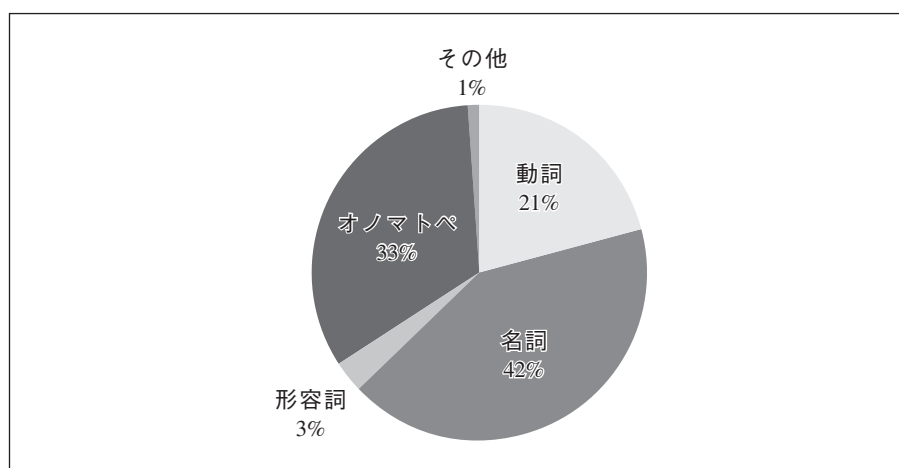
13名の回答はのべ270語に分類された(Table 2)。分類毎の比率を示したものが、次の Figure 2である。最も用いられたのは名詞であり、114語(全体の42%)であった。自由記述ではこれらの名詞に形容詞や副詞、オノマトペなどで修飾がなされており、動きの単一の名詞だけで表現したものは、9語(3%)であった。

個々の記述についてもその実際を検討するため、10のリズムの中で生後最も早く出現する sucking (乳を吸う)リズムを一例としてまとめ、その全回答を示したのが Table 3である。映像から抽出した特徴的な動きを示したのが Figure 3である。

共通して用いられていた用語は、「パクパク」「くねくね」であった。また提示された映像では指先を細かく開閉していたため、「パクパク」の対象が手と記された例が2つ、「モグモグ」の場合が一例見られた。

Table 2. KMP 動きの映像からの自由記述の品詞分類結果

分類	動詞	名詞	形容詞	オノマトペ	その他	合計
sucking	1	8	2	18	0	29
snapping/biting	4	13	1	16	0	34
twisting	6	6	3	9	0	24
strain/release	6	6	1	12	1	26
running/driftng	8	13	0	7	2	30
starting/stopping	13	14	0	1	1	29
swaying	2	14	0	11	0	27
surging/birthing	13	11	0	4	0	28
Jumping	1	14	0	7	0	22
spurting/ramming	3	15	0	3	0	21
合計	57	114	7	88	4	270

**Figure 2.** 自由記述にみられる品詞毎の割合**Table 3.** Sucking Rhythm についての全回答

回答者	思いついた言葉
A	パクパク, フニャフニャ
B	フワッフワッフワッフワ
C	頭をつりつり 宙をつまむ
D	小さく小さく...
E	びよびよ
F	パクパク
G	ぎゅっぱぎゅっぱぎゅっぱ
H	キュッキュツ, くねくね 腰ふわふわ
I	パクパク
J	体ふにゃふにゃ, 手はパクパク
K	ぱくぱく, しゅっしゅ, くねくね, 困った顔
L	手モグモグ
M	手をパクパクさせる. やわらかい動き.

**Figure 3.** Sucking Rhythm の動き

(2) テンションフロー特性

相反するフローの動きについての全回答を示したのが、Table 4 である。それぞれの Flow の特徴的な動きを示したのが Figure 4,5 である。

Table 4. Flow Adjustment & Even Flow についての全回答

回答者	Flow Adjustment	Even Flow
A	カクカク、ロボット	一本線、静か
B	見ないで、見ないで	平行に
C	ロックロックロック	水平線
D	見ないで見ないで見ないでー	ン～
E	まぶしい	のっそり
F	カマキリ	まっすぐ
G	のりのり	ゆっくりセーフ
H	かかかかか	まっすぐひろげえ
I	かくれる	ゆっくりのばす
J	カクンカクンカクンカクンウィーン	水平線、手をスィーっと
K	ひょいひょい、あれ？あれ？、時計	ゆっくり、手を広げる、しゅー
L	ロボット	T のび
M	ロボットダンス、	ゆっくり両手を広げる、



Figure 4. Flow Adjustment の動き



Figure 5. Even Flow の動き

Flow adjustment については、「ロボット」が3例、Even flow については、「ゆっくり」が3例あった。また用いられる表現の言葉は異なるものの、語尾を長めに伸ばす記述が3例見られた。

(3) 前駆エフォート

日本語の逐語訳では、相対する意味とならない Flexibility と Channeling について、その全回答を Table 5 に示した。それぞれの動きの特徴をとらえた動きを示したのが Figure 6,7 である。

Flexibility については、「ねこ」に関する表現が3例、「まぶしい」の形容詞が2例、「くねくね」のオノマトペが2例見られた。Channeling では、「苦悩」が2例、頭をかかえたり痛いとする表現が3例見られた。

4. 考 察

(1) 動きの全体のイメージを想起させる言葉

今回の調査では、映像に映し出された動きを表現する際、動きの主体や客体となる対象物や人を表すために、名詞が最も多く用いられていた。その名詞の動きを表す際特徴的だったのは、形容詞による修飾ではなくオノマトペを多用していたことであった。270語中、形容詞は7語のわずか3%に対し、オ

Table 5. Flexibility & Channeling についての全回答

回答者	Flexibility	Channeling
A	くねくね, おさるさん	なにあれ? コワイ!
B	まぶしい, まぶしい, まぶしい	あれ? なんで一?
C	ロックロックロック (フラッシュがまぶしいバージョン)	何かを考えて, 頭をかかえこむ
D	あっち, こっち, どっち	苦悩
E	しくしく	かみなりがヒカって, 落ちそうでこわい
F	ねこの手	苦悩
G	まぶしい	上になんかあって顔をかくす
H	見ないで見ないでやだやだ	あーっやってしまったと頭をかかえ
I	動物のマネ, 犬, ネコ	なやむポーズ
J	ねこロボット!! ニャンニャンカクンカクン	あなた…なぜ浮気なんてしたの?
K	くねくね, 泣いてる	あれ? 頭痛ーい, 止まる, 見上げる
L	まぶしい, やめて	ぼー
M	ライトが当たってまぶしい.	何かを見て, 考える.

**Figure 6.** Flexibility の動き**Figure 7.** Channeling の動き

ノマトペは 88 語 33%であった。主体であれ客体であれ名詞の動きを直接的に表す動詞ですら、57 語 21%であった。このことは、オノマトペが単に名詞を修飾しているというよりも、その音の響きの中に動きをも含んでいたと考えられる。調査用紙において、「その動きを表すと思われる言葉を自由に書いてください」と教示する際、補足として「動詞、名詞、形容詞、オノマトペ、いずれでもいくつでもかまいません」と補足した。他の品詞も具体的に羅列した中で最後に例をあげたオノマトペが最も多用されていたことは、動きのイメージをあいまいながらも他者に伝える場合、オノマトペのようなリズムの響きが有効であることが示唆される。日本語という言語において、他の言語よりもオノマトペが極めて発達しているという指摘¹⁰⁾もあり、すでにこうしたオノマトペが示す擬態語の世界を、日本語と英語の両原語から表現使用する取り組み¹¹⁾もなされている。今後逐語訳での限界を感じる場合、言葉のリズムを意識した意識も訳語の候補として有力となると思われる。

またテンションフローリズムの中で取り上げた sucking は、本来乳児の口元から紡ぎだされるリズムである。しかし映像に提示された sucking の動きは全身で表現されており、特に手先を用いて動きを提示する場面(Figure 3)が見られた。その分「手」その他「頭」「腰」などの他の身体部位が主体となる動きの説明が回答になされていた。実際の日本語訳出では、本来の吸うリズムをふまえて「吸う」となるのだが、この sucking のリズム特性は、まさに映像の中で全身を用いて表現されるリズム性である。つまり、口元のリズムが全身に波及するという点を意識した上での「吸う」リズムとしての理解が必要であろう。「パクパク」「ぴよぴよ」「キュッキュッ」「しゅっしゅ」のようなテンポあるリズムの中に、「くねくね」「ふにゃふにゃ」「フワッフワッ」した「やわらかい動き」要素も加味されているのがまさに sucking であることがわかる。乳児の口元から生まれたリズム特性が、全身に波及してくる様が、これらの個々の表現を全体で見渡すことによって浮かび上がってくるのである。

(2) 二項対立概念をふまえた訳語の選択

LMA を中心とする運動分析¹²⁾において、ひとつの運動の質は、対立する2つの動きの特性に分類されている。例えば、エフォートは *fighting* (戦闘的, 攻撃的) と *indulging* (陶酔的, 服従的) に分類されており、すべてのエフォートの要素(時間, 空間, 力性, 流れ)が二分されている。流れを示す *flow* において、*fighting* エフォートは *bound flow*, *indulging* エフォートは *free flow* とされている。

このことは、KMP における *flow* の概念成立にも影響しており、*flow adjustment* と *even flow* は、二項対立を意識した訳出が必要である。しかしながら、語彙だけを考えるなら、*adjustment* は調整を意味し、*flow* を調整する動きとしてしかとらえることができない。また *even* は平らを意味し、動きの映像においても Figure5 で示した、腕を水平に広げる動きが特徴となっている。平らの反対は平たんではない状態を意味するが、調整という意味だけではその状態を表現できない。*Flow adjustment* の回答では、「カクカク」「ロボット」などの表現が複数見られ、ぎくしゃくした機械的で直線的ないびつな動きを想起できる。この動きのイメージと、*adjustment* すなわち調整という本来の言葉の意味を合わせることにより、フローが様々に調整される過程では、多様な試行錯誤的動作が含まれていることが容易に想定される。したがって試行錯誤する動きにおいては、なめらかさは含まれず「ゆっくり」「のっそり」した動きとは対照的な、*fighting* (戦闘的攻撃的)かつ *bound* (拘束された)ものとなるのである。

同様に、*Flexibility* と *Channeling* についても対立するエフォートの要素を意識しなければならないことは明らかであり、「柔軟性」と「チャネリング」の逐語訳では意味をなさない。柔軟性という言葉はやわらかでなめらかな動きのイメージであり、実際の映像から想起されたのは、「くねくね」や「ねこ」であった。映像で手を顔の前に出し隠すようなしぐさ(Figure6)が見られたことから、「まぶしい」の表現もあった。対照的な「ロボット」や「カクンカクン」した動きの表現も見られたが、何れも「ねこ」「ニャンニャン」と組み合わせられていたため、純粋にかくばった固い動きを意味するものではないと思われる。従って、*Flexibility* は「ねこ」のしなやかな動きを含んだ柔らかな動きにつながるものであろう。一方 *Channeling* では、「苦悩」して「頭をかかえ」て「悩む」動きが表現されており、何かを模索する動きであってもそこにはしなやかさは見られず、「何かを考え」ながら模索の様子が浮かびあがっている。したがって、*Flexibility* ではしなやかさを *Channeling* では悩ましさを加味した、対照的な模索する動きであることをふまえた訳語が適切と思われる。

このように、KMP で示される動きの特徴は、単なる辞書的意味合いでは日本語で表現できないことが明らかであり、こうした二項対立概念の訳語の選択においては、思い切った意識が求められることが明確となった。

(3) 発達理論をふまえた訳語の選択

テンションフローリズムは、0～6歳までの発達段階で見られる特徴的な動きのリズムを示しており、⇔でつながれた言葉は二項対立ではなく、同時期に出現する二項対立の動きのみ/でつながれていた。前出の拙稿では、これらのリズムを Table6 のように訳出していた。

Table 6. テンションフローリズムの逐語訳

誕生から1歳	乳を吸う⇔噛み付く/噛む
～2歳	捻る⇔緊張する/弛緩する
～3歳	走る/漂う⇔始める/止まる
～4歳	揺れる⇔押し寄せる/生まれる
～6歳	跳ぶ⇔力走する/激突する

* 原語は Table 1 の上段に示した。

⇔の左列は、同行の段階の中でより早く出現する動きであり、右列はその後に出現する。子どもの発達上特徴的とされるこれらの動きであるが、上記の逐語訳だけでは子どもの発達に即した動きの出現であることを意識することは難しい。

児童精神科医であった Kestenberg は Freud, A. の精神分析的発達理論を基盤とし、発達段階を口唇

期(oral phase), 肛門期(anal phase), 尿道期(urethral phase), 内性器期(inner genital phase), 外性器期(outer genital phase)に分類している。口唇期では, 母親の乳房や哺乳瓶から「乳を吸う」経験をし, 歯の成長と共に, 乳首を噛んだりしながら哺乳行為以外の遊びの動作も加わってくる。さらに離乳食が始まることで食べ物を「噛む」という新たな経験も可能となり, 大きく口を開けて噛んだり, しっかり噛み砕いたり多様な咀嚼方法が生まれるようになる。さらに肛門期において, 体を「捻る」ことで体位を変えたり, 便をこらえて「緊張する」ことがあったり, 「弛緩する」ことが排便につながったりする。KMPで提示される動きには, このような精神分析学をふまえた発達段階ごとの動きを理解しておかなければ, その原語の真意を理解することは困難である。

特に, 尿道期については Freud, S. の精神分析学では取り上げられることはなく, 一般的な精神分析とは異なる分類方法となっている。同様に内性器期, 外性器期も Freud, S. 理論においては男根期と称されている。尿道期・内性器期については, Kestenberg と共同研究者による子どもの直接観察によって見出された発達段階であり, 排尿の制御と内性器(膣・子宮, 前立腺・陰囊)感覚の始まり, それぞれの時期の行動や認知の特徴などを示している。Kestenberg が用いたこの5段階の発達をふまえながら, 実際の子どもの成長に伴い獲得される運動機能上の動きと, その背景にある子どもの心の発達とのつながりを視野に入れた KMP 用語の解釈が今後必要とされるのである。

5. おわりに

KMP の理解に不可欠な日本での解釈の問題は, LMA と同様にある種の言葉の壁が存在している。表面的には理解できていても, 具体的な動きのイメージが湧かずに, 「わかったようなわからないような…」感覚が, 運動分析の学びにはつきまとっている。大貫の指摘する「ラバンは理解するものではなくそういうふうになっていると了解する」ことの必要性は, KMP においても同様であろう。技法として確立されている KMP は, ダンスセラピーにおいてはクライアントの動きの分析や評価の手段として活用されているが, その理論的基盤となる精神分析的解釈や理論の検討は, あまりなされてこなかった。しかしながら, 今回 KMP を日本語に置き換えて理解しようとする時, その理論の本質にふれなければ“なるほど!”と合点がいけないのも事実であった。

今回の研究は, 映像からイメージされる動きを示す言葉を手がかりに, 辞書的意味合いを越えた日本語での KMP 用語を見出そうとする試みであったため, KMP が成立していく基盤となった精神分析的発達理論をふまえた解釈を深めるには至っていない。今後は, KMP の実用性の検討と並行しながら, Kestenberg 自身の KMP 作成にいたる理論的基盤や児童精神分析学の理論を再検討しながら, 研究を進めていきたい。

文 献

- 1) Kestenberg-Amighi, J.& Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam:Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)
- 2) Kestenberg, J.&Sossin, M. The Role of Movement Pattern in Development, Dance Notation Bureau Press, pp.5-122 (1979)
- 3) Lewis, P.&Loman,S.ed., The Kesterberg Movement Profile Its Past Present Applications and Future Directions, Antioch New England Graduate School, pp.9-173 (1990)
- 4) Loman, S.& Foley,L, Models for understanding the nonverbal process in relationships, The Arts in Psychotherapy, 23 (4), pp.341-350 (1996)
- 5) Loman, S.&Merman, H.,The KMP: A Tool for Dance/Movement Therapy, American Journal of Dance Therapy, 18 (1), pp.29-52 (1996)
- 6) 大橋さつき, ダンスセラピーにおける動作分析法の適用性, お茶の水大学人文科学紀要, 53, pp.315-325 (2000)
- 7) 大橋さつき, 共感する身体を探る—ダンスセラピーにおける Kestenberg Movement Profile 理論より—, お茶の

水大学人文科学紀要, 54, pp.223-232 (2001)

- 8) 崎山ゆかり, 子どもの動きの評価法に関する基礎的研究—ダンスセラピーにおける Kestenberg Movement Profile を手がかりにして—, 武庫川女子大学紀要人文科学編, 57, pp.19-26 (2009)
- 9) 大貫秀明, ~ラバンを「了解」するためのいくつかのヒント~, 第18回日本ダンス・セラピー協会大阪大会抄録集, p.11 (2009)
- 10) 得猪外明, へんな言葉の通になる—豊かな日本語, オノマトペの世界, 祥伝社新書, p.15 (2007)
- 11) 五味太郎監修, 英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典, (1992)
- 12) ラバン, 身体運動の習得, 神沢和夫訳, 白水社, pp.1-248 (1985)